



菊地秀行

第1部 バルバロイの霸王

# 魔戦記

KADOKAWA NOVELS

アレキサンダー大王の魂が蘇<sup>よみがえ</sup>り、今ここになる魔戦が始まった—。超大型新鋭期  
炸裂<sup>スパーク</sup>する超時空伝奇アクション。



ガクカパルズ

昭和六十年十一月二十五日初版発行  
昭和六十年十二月二十日再版発行

著者 菊地秀行

発行者 角川春樹

魔戦記 第1部 バルバロイの霸王

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二三 振替東京三〇五〇八  
二三三 電話 営業〇二三六八五二 編集〇二三六八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-778801-5 C0293

# 魔戦記

第1部 バルバロイの霸王

菊地秀行



KADOKAWA NOVELS

アレキサンダー大王の魂が蘇<sup>よみがえ</sup>り、今こ大王の魂なる魔戦が始まった——超大型新録<sup>よみがえ</sup>った——。超炸裂<sup>エバーフ</sup>する超時空伝奇アクション。空伝奇ア



# READERS NOVELS

●作者のことは

この作品は、私がこれまで描いてきたものとは少々異なり、超人の「旅」をテーマにしています。

遠い古代の英雄を現代という設定の中で生かすことは、私の長年の夢でした。

彼等のもつ、今は失われたパワーが、現代にどのような衝撃を与えてくれるでしょうか？  
そこから私の小説が始まります。そして、私の旅も――。

読者の皆さんと共に旅立てたら、これ以上の幸福はありません。

略歴 一九四九年千葉生。青山学院大卒。『魔界都市(新宿)』でデビュー。著書に『魔界行』『妖魔戦線』他。

8801-5 C0293 ¥640E

西640円

需要全本请在线购买:

www.e...





ガドカワパルズ

昭和六十年十一月二十五日初版発行  
昭和六十年十二月二十日再版発行

著者 菊地秀行きくちひでゆき

発行者 角川春樹

魔戦記ませんき 第1部 パルパロイの霸王はおう

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一丁目三番 振替東京三〇一五三〇八  
〒一〇三 電話 営業〇三二三六八五三 編集〇三二三六八四五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-778801-5 C0293





KADOKAWA NOVELS

---

# 魔戦記

第一部 バルバロイの覇王はまろう

菊地秀行

魔戰記 第1部 目次

第一章 角鹿つねがという男

11

第二章 凌辱りやうじよくの炎

28

第三章 旅立ち

55

第四章 我、東京にあり

79

第五章 地底みこの巫女

95

第六章 豪殿神社の秘宝

110

第七章 初源の地へ

138

第八章 熱砂の果て

157

## 第一章 角鹿つゆがという男

羽田空港のカウンターは、午前七時前というのに  
いやに混んでいた。人の数が多いだけではなく、空  
の旅の送迎場所という以上に騒然たる雰囲気ふんいきが渦を  
巻いている。

いつもは水みたいに落ち着いている常務の黒沢ま  
でが、妙にそわそわと周囲を見廻しながら、  
「どこか、その、賑にぎやかですな」  
と口走ったほどだ。

「切符の手配はできておるんだらうな」

私は社長室長の峰岸みねがしに訊いた。この程度のざわつ  
きは、成田やロス、ロンドンのヒースロー、パリの  
シャルル・ド・ゴールやオルリーなら毎度のことだ。

いちいち吞のまれていては、後の仕事に差しつかえる。

とはいうものの、スーツケースだの、トランクだ  
の、安物のリュックサックだの、色とりどりの旅行  
具を手や背にした乗客たちを取り巻く雰囲気ふんいきが、そ  
ういった空港の大小とは関係ない、全く異質の、ど  
こか莊嚴じやうげんなものを含んでいることは、私も気づいて  
いた。

おかしい、確におかしい。こういう場合は——  
峰岸みねがしに向かって、ジェット機を別の便に切り換えろ  
と言いかけ、私は口をつぐんだ。

首席秘書の武田沙織さおりがようやくチェックを了おえた  
らしく、日航のカウンターから足早に戻ってくるの  
が見えたためである。

「搭乗まで一五分あります」

と沙織は、伶俐れいりな美貌びやうに勝るとも劣らぬ涼やかな  
声で言った。その背後で、彼女とすれちがったばか  
りの乗客たちが足をとめ、ぼんやりした眼差まなざしをこ

ちらへ向けてくる。国際女優顔負けの容姿に度胆を抜かれてしまうのだ。

「その切符、キャンセルしたまえ」

無愛想な指示にも、沙織は眉ひと筋動かさなかつた。暴君の気まぐれには馴れているというわけだ。

細めの身体と物静かな美貌からは想像し難い胆力の主だということは、私の秘書歴五年という輝かしいキャリアが証明している。

これまでの最高記録は二年と半年である。

「承知しました」

軽く会釈してカウンタ―へ戻る後ろ姿から眼を離し、私はさっさとロビーの椅子のひとつに腰をおろした。黒沢や専務の酒田を先頭に、見送りの社員たちがあわてて尾いてくる。

「君らもかけたらどうだ」私は思いきり楽な姿勢でくつろぎながら言った。「立ちつづけるなどというのは、一分といえども体力の浪費だ。次の仕事に影

響する」

「まったくで」

黒沢はうなずいたが、誰もかけようとはしない。

彼らに構わずラ・コ罗纳・コ罗纳を取り出し、名前も知らぬ社員のひとりがさし出したライターで火をつけると、私は、気持を落ち着けるべく意識を丹田に集中した。週二度四時間のヨガと一度三時間の禪の効果は靨面で、下腹から湧き上がるあたたかい自信に充ちた波は、数瞬のうちに全身を駆け巡り、外気に呑み込まれそうな自我をたやすく引き戻した。「ところで、護衛の方は、確かな連中を選んであるんだらうな？」

私の囁きに、峰岸はうなずいた。

「ご安心下さい。いずれもプロのボディガードです。もと刑事の上、柔道、空手、五人合わせて三二段になるそうです」

「腕つぶしが強くても頭が空では何にもならん」私

は肺の中の紫煙を思いきり吐き出してから言った。

「一〇人も組んでかかれれば、五人の護衛を罫かにかけてなどいとたやすい。グリコ・森永は、一〇〇分の一にも満たない人数の脅迫犯相手に、企業全体があの体たらくだ。我が社は十倍の規模があるとはいえ、阿呆あほうどもが私を誘拐あつかいする気になれば、五人もいれば十分だ」

「それは……」

峰岸が絶句したとき、ロビーの片隅——喫茶室の方角で、どっと黄色い嬌声きょうせいが湧き上がり、客たちが一斉にふり向いた。

ちらと眼を向け、私の首は停止した。色とりどりの洋服と和服姿の女たちに取り囲まれた男——これはどうでもいい。しかし、囲んだ女たちの大半に見覚えがあるとなると、やはり男として驚きは隠せな  
し。

傍若無人な笑い声をたてる一団は、ぞろぞろと口

ビーを横切り、私たちの方へ近づいてきたが、うち、ひとりが無意に私の方を見て、あら、草薙くさなぎさん、と絞り出すような声をあげた。地味な茶のスーツに身を包んでいるが、日本髪に和服姿より似合うようだ。赤坂の芸者で美春みはるという。

「やだ、社長さんもご出発!」

奇妙な言い方をするな、と思つたが、このときはもう、他の女たちも私に気づいたらしく、艶然えんぜんたる微笑を浮かべるうちの何人かが、後ろをふり返り、ふり返り、足早に私の方へやってきた。銀座「夢殿」の咲子さきこママと六本木「メダリオン」の美智子みちこまではわかるが、後は顔しか知らぬ相手だ。

「あら、草薙社長——お久し振り。また、ご出張? 帰ってらしたら、また寄つてよ」

と美智子が言ったが、私はじろりと、残った女の方を見て、

「わざわざ挨拶あいさつに来なくてもいい。早く彼のところ

へ戻りたいんじゃないのか」

「なによオ、せっかく来てあげたのにイ」

咲子が持ち前のきんきん声で不満そうに言った。

「——いいじゃない、社長に社員とはいえ、同じ会社の仲間なんだから」

私ばかりか、困惑顔で取り巻いていた重役や社員たちにも動揺の気配が湧いた。

「何だね、それは？」

と峰岸が素早く訊いた。普段はむっつり顔で知られているが、相手が女となると行動力の塊りに変わると評判だ。室長としての能力に問題はないものの、彼の部下に命じて素行調査はつづけさせてある。

「あら、角鹿さん、お宅の社員でしょ——そうか、本社のお偉いさんじゃあね」

「なんだね、それは？」

今度は私が訊く番だった。女たちの間で、丸い童顔が、照れ臭そうに私たちの方を向いている。

「あの男、角鹿さん、お宅——住川重工明石支社の社員さんよ。ね、ひよつとして——草薙さん、どちらへいらっしやるの？」

「明石だ」

「やだ、奇遇ねえ」と咲子は胸の前で手を組み合わせた。子供っぽいところが受けている三十代半ばのママだが、これは営業用ではない。そうさせたのは、どうやら私ではないようだ。

「角鹿さんも帰るとこ。なんでも、ジェット機使わなきゃならぬくらい急いでるんですって。本社社長と支社の一介の平社員が呉越同舟なんて、ちよつとしたロマンじゃなくて!? ね、同じ便でしょ？」

答えぬうちに、角鹿某は峰岸に引かれるようにして、私たちの方へやってきた。頭を掻いている。口の廻りは無精髭で覆われていた。身だしなみには気を遣わない男らしい。

私の前に来ても、困ったような表情で突っ立って



いるばかりだ。堪りかねたように、峰岸が、

「こちらが社長だ、ご挨拶せんか？」

「あ!？」

と無精髭の奥で、両眼が驚きに満ちてかがやいた。

変わった光だ。恐縮も脅えもない。

私はそつぽをむいた。

「失礼いたしました。明石支社の角鹿荒人です」

若々しい声が揚々と耳朶を打った。

奇妙な静けさが私の裡に甦ってきた。ある考えが

胸を横切り、私は少なからず驚いた。

先刻の胸騒ぎともいうべき雰囲気は、この男の登

場を待つ前の、期待感が醸し出したものではなかつ

たか。

緞帳一枚を隔てて、名優の出現を待つ観客たちと

等しく。

馬鹿な、と私は胸の中で否定した。第一、私はこの男を知らん。眠ったような町で瑣末な作業に励む

一介の平社員などは——

「ひよっとして、社長も七時発——同じ飛行機ですか？ でしたら光栄です」

私の無視も気にせぬ清々しい声に、私も没々彼の方を見上げた。

他者に与える印象を社員の採点規準とすれば、この男には何点をつければよからうか。

髪は一応、櫛を入れていようだが、整髪料はつけていないらしく、木の根みたいに乱れているし、

顔中を黒く染めた無精髭にいたっては言葉もない。

Yシャツの第一ボタンははずれ、ネクタイもひん曲

がっている有様だ。

見てくれは零点、どころかマイナスだ。

そのくせ——

何よりも角鹿荒人を印象づけているものは、全身

から溢れる妙に明るい雰囲気であった。かがやきと

呼ぼう。それは、そつぽを向いた私をふり返らせ、

呼ぼう。それは、そつぽを向いた私をふり返らせ、

呼ぼう。それは、そつぽを向いた私をふり返らせ、